

京都大学教育研究振興財団助成事業
成 果 報 告 書

平成27年8月31日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団

会 長 辻 井 昭 雄 様

所属部局・研究科 文学研究科

職 名・学 年 博士後期課程2年

氏 名 谷 塚 巖

助 成 の 種 類	平成26年度・若手研究者在外研究支援・在外研究長期助成	
研 究 課 題 名	キルケゴールと「キリスト教的なもの」	
受 入 機 関	デンマーク・コペンハーゲン大学 (Københavns Universitet)	
渡 航 期 間	平成26年 8月 1日 ~ 平成27年 7月31日	
成 果 の 概 要	タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料 <input type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> 有()	
会 計 報 告	交付を受けた助成金額	2,000,000円
	使用した助成金額	2,000,000円
	返納すべき助成金額	0円
	助成金の使途内訳	航空賃: 162,700円
		宿泊料: 799,200円
		日 当: 1,038,100円
当財団の助成について	(今回の助成に対する感想、今後の助成に望むこと等お書き下さい。助成事業の参考にさせていただきます。)	

京都大学教育研究振興財団：研究成果の概要

平成 26 年度在外研究長期助成：谷塚巖

研究課題：キルケゴールと「キリスト教的なもの」

報告者は、平成 26 年度在外研究長期助成を受けて、デンマークのコペンハーゲン大学に所属し、研究を行った。キルケゴール研究を進めるにあたって、デンマークにおいて語学を習得し、デンマーク語による第一次・第二次資料を読みこなしていくことは、現在の研究状況において必須の要件となっている。この度、貴財団の助成によって、一年間コペンハーゲンに滞在し充実した研究活動を行なうことができた。貴財団に心から感謝の意を表するとともに、ここに研究成果の概要を報告する。

報告者は、キルケゴールの宗教思想を、特にその仮名性という観点から解明することを目的に研究をしている。キルケゴールには、いわゆる「美的著作」と「宗教的著作」という二つに分類される著作の形式が存在する（現在の研究状況においては、キルケゴールの日誌・遺稿集も、重要な一つの形式として分類されている）。前者には、キルケゴールの名前とは異なるさまざまな仮名があてがわれ、後者には、キルケゴール自身の S. Kierkegaard という署名が用いられている。このような著作の形式的な分類は、キルケゴールによって意識的になされており、その上で、キルケゴール自身は、仮名諸著作と自らとが切り離されるべきであることを読者に要求している。報告者はこの点に注目し、仮名性の問題として研究を行ってきた。文献は、主に、ヨハネス・クリマクス著『『哲学的断片』への結びとしての非学問的あとかき』に付された、キルケゴールの署名入りのあとかき「最初にして最後の言明」を用い、その分析から仮名性の意義について次の点が明らかになった。すなわち、仮名は、キルケゴールにおいて、自存する詩的実在的な個性として考えられており、詩的な創作活動において必然的に要求されるものとして考えられていること。そしてこのことは、「倫理的なもの」を、読者自らにおいて再考させるための、コミュニケーションの方法と結び付けて理解され得るという点である。この研究成果は、研究ノート「キルケゴールの仮名テキストと「倫理的なもの」」としてまとめられ、『基督教学研究』（第 34 号、2015 年）に掲載されている。今後、キルケゴールにおいて、詩やその意義をめぐるどのような理解がなされていたのかに関してさらに研究を進めていく方針である。

滞在中には、本研究を進めていく上で必要な先行研究の調査およびデンマークにおける研究動向の把握を行うことにも努めた。報告者は、コペンハーゲン大学の神学研究科、文学研究科の図書館、デンマーク王立図書館およびデンマーク・キルケゴール研究センターに併設されている図書室などを利用し、先行研究の調査を行ない、必要文献を入手した。特にデン

マークにおける研究動向については、1996年より、キルケゴール研究センターから毎年発行されている *Kierkegaard Studies: Yearbook* を2014年まで調査し、研究動向の大枠的な把握に努めた。デンマークにおいては、90年代に入り、*SKS/SKSK* と記される批評版全集およびその注解書の刊行が始まったが（2013年に完了）、それと並行する形で、キルケゴールの思想や全体像を、キルケゴールが生きた時代のコンテクストから客観的に解明するという、歴史的研究および典拠的研究が成果を上げているということが確認できた。デンマークにおける研究動向については、『キリスト教学研究室紀要』（第3号、2015年）に、報告書「*Yearbook* で見るキルケゴール研究の動向」として掲載されている。先行研究の調査に関しては、*Yearbook* の他にも、同センターが発行する *Monograph Series 1~32* を、コペンハーゲン大学が提供するインターネットアクセスを通して入手することができた。これらの文献は、今後の研究の基礎的資料として重要であると考えている。

また、研究を進めていく過程で、キルケゴール研究における方法論の問題が、重要な考察課題として浮かび上がってきた。従来より、キルケゴール研究においては、テキストに内在する本質的な問題から、テキストをどのように扱うことが研究上適切なのか、という方法論上の問題が意識されてきた。なぜなら、キルケゴールのテキストは、そこで語られている事柄を自らの問題として受け取るようにして、読者の内面において実存的に読まれることを本質的に要求するからである。日本においては、実存弁証法と呼ばれるこの内在主義的な研究が、ドイツ語圏の文献を基礎にしてなされてきた。しかしデンマークにおいては、このような方法論による研究に対して、キルケゴールの一側面を捉えるものに過ぎないという評価が下され、キルケゴールの全体像を包括的に捉えることができる、前述の客観的な方法論が提唱されてきた。この両方法論の乖離をどのようにして埋めるのかという問題は、方法論的な考察の課題として重要であろう。この方法論についての予備的考察は、2015年9月に開かれる、第74回日本宗教学会にて発表を行う予定である。

この一年間の留学を通して、キルケゴール研究に必要な基礎を固めることができた。今後この基礎の上に立ちながら、博士論文の執筆に向けて研究を進めていきたい。